

〔特別企画展 日本の仏教美術—祈りの形象—展によせて〕

仏教美術の「光」と「影」

日本において古代中世の美術は、仏教の受容とともに発展を遂げていきました。瓦葺きの壮大な寺院建築、そこに安置され礼拝の対象となった仏像や仏画、あるいは金銀で華麗に彩られた装飾経典など、仏教美術は輝きに満ちあふれています。

しかし、「光」あるところに必ず「影」はつきものです。衆生の救済を願う仏教は、救いの幸福を明るく「光」で象徴すると同時に、救いを求めずにはいられない辛い現実を暗い「影」として表徴することも忘れませんでした。

たとえば大和文華館には「病草紙断簡」(図1)という作品が所蔵されています。中央に男がうつぶせに寝そべています。現代の私たちの目からすると、上半身裸であるのに烏帽子(黒い大きな帽子)を被っているのは奇異にみえるかもしれませんが、本図が制作された当時—おそらく12世紀末期頃と推定されます—、男性は室内外を問わず常に烏帽子を着用し、寝ているときさえ脱がないのが習慣でした。さて、画面向かって左側にはもう一人、烏帽子を被った男が片膝立ちで座しています。医師である彼は、横になった男の背に太く大きな鍼を打とうとしている。対して、画面右方からは袈裟を着て左手首に数珠を巻いた僧侶が男の背を覗き込み、どこに鍼を施すべきかと医師と語りあっているようです。この時代、専門的な知識を持った医師と宗教的な知識を有した僧侶とは協力して病気の治療に当たっていました。そうした様子を本図は描いていますが、しかし、こ

で、患者である男を無視し、その頭越し(背中越し)に治療方針を決めてしまっているように見えます。哀れな男は—自分の背中でいまだどんな施術が試みられているのか知らぬまま— 苦しい治療に我慢しているのです。

この世に生きるかぎりにおいて、人は病気から逃れることはできません。歯が痛い、頭が痛い、お腹が痛い… 病気それ自体が苦痛なら、場合によっては病気を治すための治療がさらなる苦痛を生み出すこともあります。ここに描かれた針治療は、その一例といえましょう。

ところで、あらためて「病草紙断簡」を見直してみると、ここには右に記した三人の男たちと離れて、もう一人別の人物が秘やかに描かれているのに気づきます。画面奥から御簾をそっと小さく開いて覗き見る女が、それです(図2)。御簾の向こう側にいる彼女は治療の場とは別の空間に位置しています。患者も治療者も男ばかりである場に女性である彼女が入り込む余地はありません。いわば彼女は「他者」として治療の光景を外側からクールにみつめているといえるでしょう。彼女の視線を追いながら、ここで私たちは画面を見つめる私たち自身の視線の方向を意識的に追ってみたい— すると、どうでしょう。私たちもまた御簾の向こう側にいる彼女と同じように、画面中央で展開される治療の光景をいわば「他人事」としてみていることに気づきませんか。正面ではなく横顔しかみせない医師と僧侶はどこかよそよそしく、私たちは彼らに全幅の信頼を寄せる気にはなれませ

ん。また、背中に鍼を打たれ苦悶の表情を浮かべる主人公はいかにも滑稽で、彼にストレートに同情することも困難です。彼ら三人から距離をおいた、まさしく「他者」の位置に私たちは立っているのです。このことを意識したとき、覗き見をする女は、本図を鑑賞する私たちの姿を画中に反映させた、いわば「鏡」のような存在であると理解されることでしょう。

この大和文華館蔵本以外に、京都国立博物館や香雪美術館あるいは福岡市美術館などにも「病草紙」は所蔵されています。それらを総覧するといずれも、病気それ自体の苦しみに加え、それを治療することから生じる苦痛、そしてさらに、その苦痛を「他人事」として眺めて(場合によっては)病気を嘲笑や差別の的とみなすことから生じる苦痛(まなごしの苦痛)を表出しているのに気づきます(詳しくは拙稿「病草紙研究」『仏教説話画の構造と機能』(中央公論美術出版、2003年)をご参照下さい)。大和文華館蔵本は紙の材質や筆致表現の点で他館のものとは些か異なりますが、

こうした主題の表し方は一致します。ここには、冒頭で述べた仏教美術の「影」の表徴、すなわち、私たちの生きる現実がいかに様々な苦痛に満ちた世界であるかが視覚的に明示されています。そして見逃してならないのは、鑑賞者である私たち自身の立場(病人との距離感、病気への偏見)さえも、ここには映し込まれている点です— 「光」と「影」のあわいにて自己を映し出す「鏡」、それが仏教美術の本質といえましょう。

* * *

今秋(2007年11月16日~12月24日)開催される「日本の仏教美術—祈りの形象—」では、「光」を示す作品として、大和文華館蔵「一字蓮台法華経」ほか名品を展示します。対して「影」を示す作品として、この大和文華館蔵「病草紙断簡」あるいは地獄を統治する閻魔王を描いた「十王図」などを展示します。加えて、京都国立博物館所蔵「病草紙」も特別出陳の予定です。どうぞ、ご期待下さい。

(奈良女子大学准教授 加須屋誠)

図 1



図 2



季刊 美のたより No.160

平成19年9月30日

発行 大和文華館